

近代日本における「世界」－宗教文脈から空間政治への概念構築と中国

著者	王 曉雨
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	6
ページ	113-121
発行年	2013-03-27
その他のタイトル	The Conception of World in Modern Japan-Constructed from Religious Context to Political Space And The Influence From China
URL	http://hdl.handle.net/10112/7604

近代日本における「世界」

——宗教文脈から空間政治への概念構築と中国

王 曉 雨

The Conception of World in Modern Japan

—Constructed from Religious Context to Political Space
And The Influence From China

WANG Xiaoyu

The voyages of European countries starting from the 15th and 16th centuries have greatly accelerated the worldwide fusion of different cultures. As the Western geographical knowledge was introduced, the traditional worldview has been gradually taken place of modern worldview. World, being a key concept in modern worldview, was first corresponded to Mundus in Japan in religious context. World in Japan first went beyond the religious context and then formed its spatial meaning in the geographical scope. Afterwards, along with the deepening of understanding the West and Japan itself, World in Japan gradually completed its construction of meaning in psychology and political order. This article is to analyze the establishment of World—the key target language in modern worldview and the formation of its meaning, so as to discuss the interactive relationship of ideologies and cultures of the West, China and Japan during the transition of the concept from the old to the new.

キーワード：世界 日本 訳語 世界観 近代

はじめに

十五・六世紀、羅針盤の登場によって、世界の地図が描き直された。また、資本主義の芽生えに従い、ヨーロッパ諸国は世界各地に進出し始めた。農業社会の自給自足的な経済様式が壊され、世界範囲での文化交流は歴史の流れの一つとなった。そういう歴史の流れにおいて、西洋の諸国が続々にアジアの国々にやってきて、日本の世界認識も拡大された。近代的世界観は地理知識から発足し、世界図式の再構築に伴って築かれてきた。

言葉は思想の表現形式だと言われている。接触により、思想文化が激動し、東西文化が広い範囲で溶け合っている。そのうち、言葉は思想変動の表象として変わりつつある。伝統概念から新たな概念へ転

換した。伝統観念における各要素が破れ、改めて選べられてから、再びに組み合わせられた。このような思想文化の再構築で一番目立つな表現は概念を表す用語の変遷だと考えられる。十五・六世紀宣教師の來華をはじめ、宣教活動の開展に従い、言語の翻訳は思想文化における交渉活動の大切な一環として盛んになった。辞書の編集から書籍の翻訳にかけて、新たな文化概念の輸入に対応するために、多量な訳語が造られた。訳語の選択は往々にして概念形成の出発として、理解や使用にある程度の影響を与えると推測される。

「世界」という語は近代世界観のキーワードとして、一体いつから西洋の世界概念に対訳されたかという問題は今まで定論が未だないのである。銭国紅の論述で、前野良沢が「世界」をオランダ語の「wereld」に対訳するのは一番早いと言っていた¹⁾。しかしながら、日本において、蘭学以前、桃山時代からすでに「世界図屏風」がある。その「世界」は近代文脈で使われている「世界」とほぼ同じ意味で、「地球上の諸国」と指している。そうすると、それより早い時期に対訳の記録が存在している可能性があると思われる。一方、中国の場合、劉青峰・金觀濤の研究によれば、「世界」を「地球上の諸国」という近代意味で使う最初は羅森の『日本日記』(1854)である²⁾。それは日本よりずっと遅い。しかも、『日本日記』における「世界」の近代的な使い方も日本語からの影響を受けた可能性がある。「地球上の諸国」という近代の意味で多く用いられるのは日清戦争以降、特に日本からの書籍を大量的に翻訳した後のことだと言われている。そういう原因で、先行研究で中国語で「世界」が近代文脈への変更は日本からの影響を受けたという言い方が多い³⁾。

蘭学以前、日本において、「世界」を使い、西洋の世界概念に対訳する記録が存在するかどうか。本文は「世界」が訳語として形成し、確立された過程を検討したい。それに、訳語が形成してから、概念として成立する過程を解明しようと思っている。それに基づき、近代において、西洋・日本・中国及び伝統文化と西洋文化の間に行われていた言語文化交渉活動を考察してみたい。

一 「世界」と「世界図」——宗教文脈から地理学へと

十五世紀半ば頃から、ヨーロッパ大西洋沿岸の各国が海外に進出し始めた。この海上大冒険と遠征は世界歴史大転換の幕を開いた。ポルトガルとスペインはその遠征の急先鋒と言える。土地や資金を狙い、広い範囲で航海活動を行った。両国競争の結果、スペインは西向きの路線を選び、ポルトガルは東に向けて進んでいった。室町時代の末から江戸時代の初めにかけて、ポルトガルとの貿易やイエズス会の宣

1) 銭国紅『日本と中国における「西洋」の発見』(山川出版社、2004)、157～158頁

2) 劉青峰・金觀濤『觀念史研究——中国現代重要政治術語的形成』(法律出版社、2009) 557頁

3) 銭国紅の『日本と中国における「西洋」の発見』において「中国では、宣教師たちが英語から漢訳して世界・新世界などという言葉を作ったけれども、一般に普及しなかった。そして、二十世紀に入ってから初めて、日本の地理書などが中国に流入し、中国でも「世界」という語が定着するのである。」(158頁)と書いてある。劉禾は『跨語际实践：文学・民族文化与被译介的现代性』の付録に、「世界」を英語の「world」に対訳されるのが、日本語の「セカイ」を仲介としている、と指摘した。(421頁) 鮑永鈴の『天下一世界——从概念变迁看近代东亚世界图景之变更』という論文においても同じことを論述した。

教活動に伴い、西洋文化も伝来された。宣教師たちが来日した後、宗教文学や絵を伝え、教会や宣教師養成の学校を開き、養老院や病院なども建てた。それと同時に、伝道の付属品として、西洋の医学・地理学・航海術などの科学知識も日本に伝えてきた。

中国の天下観や仏教の世界観の影響のもとで、その時期日本の世界認識は主としてインド・中国・日本三つの国に限られていた。しかし、南への航海活動及びポルトガル人との接触にしたがい、世界への認識も次第に拡大されてきた。その時期の将軍たち、織田信長であれ、豊臣秀吉であれ、徳川家康であれ、海外に強い関心を持っているのは共通点だと考えられる。地図は測量や航海術に対して、大切なものなので、紅毛たちが持ってきた世界図につよい関心を持っているのも当然であった。当時、幕府から民衆まで、世界地図を屏風に仕立てて装飾的に用いることが流行していた。

『日本古地図大成・世界図編』のデータによると⁴⁾、つまり、表一から見れば、当時の世界地図は直ちに「世界図」で名付けられたのが多い。そこには、「世界図」という呼び方に注意する必要があると思う。「世界」ももとは仏教用語である。『楞嚴經』には「阿難、云何名為二衆生世界一、世為二遷流一、界為二方位一、汝今当知、東・西・南・北・東南・西南・東北・西北・上・下、為界、過去・未来・現在、為世⁵⁾」という。「世界」は時間と空間で交わして、構成された多元的な構造だといえる。長い時間の発展を経て、「世界」という語は仏教文脈を超え、「人間社会の全体」、すなわち、「世間、世の中」の意味で日常生活や文学作品の中にも用いられていた。その「世界」という概念が仏教とともに、日本に伝わった。日本にも同じく、「世間、世の中」の意として使われるようになった。『竹取物語』において、「世界の男、当てなるも賤しきも、いかで此かぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでてまどふ⁶⁾。」という用例が見える。しかしながら、現在の「地球上の諸国」という意を表して、西洋の世界概念に対応するのは南蛮文化の桃山時代や江戸初期から始まったのである。それは近代中国よりずっと早かった。

一五九五年、イエズス会の宣教師と日本人修道士が長崎で、カレピノ編『ラテン語イタリヤ語対訳辞書』(1502刊)を母胎として、『羅葡日対訳辞書』(1595)を編集した。その辞書において、ラテン語の「mundus」(世界・宇宙)は日本語の「世界」に対訳されていた⁷⁾。それは先行研究における前野良沢の対訳よりずっと早かったのである。おそらく、西洋の世界概念を「世界」という語に対訳する最初だという可能性が考えられる。「mundus」はギリシア語の「kosmos」に起源を持ち、「秩序」の意で、人間と環境の相互作用で生じた結果を表示している。宗教文脈から見れば、仏教において時間と空間で造られ、人間が暮らす環境を表している「世界」と対応して訳されるわけも理解しうるのであろう。その上、『羅葡日対訳辞書』の序文に、「この辞書にはすべての語彙の意味と奇麗な文章、言い方、優雅な訳がなされている」と書いてある。韓一瑾が「天草における言語接触とキリシタン関係訳語」において、「当時の言語審美意識では、最も「優雅」な言語形式は「漢文」であろう。従って、より「上品」なイメージ

4) 織田武雄、室賀信夫、海野一隆編集委員『日本古地図大成・世界図編』(講談社、1975)

5) 『日本国語大辞典』(第7巻)(小学館、2006)、1287頁

6) 同上

7) 『羅葡日対訳辞書』、(勉誠社、1979)、475頁

を持っている仏教語を借りて訳したのが一定的な合理性があると思う⁸⁾、その辞書に選ばれた訳語は仏教語多用ということを指摘した。「世界」を使い、「mundus」に対訳するのもそういう原因があるかもしれない。その後出版された『日葡辞書』において「天下」に対する解説を参照すれば、東西文化間における世界観の相違も見られる。『日葡辞書』は当時来日の宣教師が日本語を習うために編集した辞書である。数人の宣教師と日本人が四年を経て完成した。1603年に出版された。その辞書において、「天下」を次のように解説した。「君主の権、または、国家⁹⁾」。伝統的な天下観念によれば、「普天之下、莫非王土」(普天の下王土に非ざるはなく)と考えられている。君主権力の管轄範囲、即ち人達が知っている限りの世界にイコールした。それと違って、西洋文化の考えによれば、君主の権の範囲はただの「国家」であり、「世界」とは同じ概念ではない。「世界」は「国家」による組み合わせたものだと言われている。それはヨーロッパ人が世界概念に対応する訳語を選んでいいる時、思考様式の相違であろう。同じ「世の中、世間」という意を持っている「世界」は、「天下」より西洋の世界観とより一層近いという可能性が考えられる。仏教用語の愛用、それに、文化上の相違、それらはおそらく「世界」を使って、西洋の世界概念に対訳する主な原因だと推測される。

宗教文脈で西洋世界概念に対訳された「世界」は、地理学上にも使われるようになった。表一が表示したように、南蛮文化における世界地図はほぼ「世界図」と呼ばれていた。それらの「世界図」は日本人に新たな世界認識を持ち入り、中国・日本・インド以外の西洋を初めて意識した。それは、日本の近代世界観に対して、啓蒙な役割を果たした。まさに田村信義が言ったように、「即ち、南蛮より新しく輸入されえた世界地図は、唐・天竺・日本だけを全世界と永く信じ込んで来ていた日本人の世界像に、言わば革命的な衝撃を与え、地球的規模において足下のわが国を見る眼を開かせたのであった¹⁰⁾。」16世紀から17世紀にかけて、世界図屏風の流行に伴い、「世界」という概念も近代世界図式も日本において、最初の種を播いた。

表一 南蛮系世界図 「日本古地図大成 世界図編」による

名 前	時 代	所 蔵
世界図、日本図	桃山時代	浄徳寺蔵
世界図、日本図	桃山時代	河村平右衛門蔵
世界図(南蛮人渡来図と一雙)	江戸時代初期	池長孟旧蔵
発心寺所蔵世界図の改写図		
旧大陸図	江戸時代初期	河盛利兵衛蔵
旧大陸図	寛永十四年 鷹見泉石模写(一八三六)	鷹見安二郎蔵
世界図(日本図と一雙)	江戸時代初期	三井文庫旧蔵
世界図(四都市図と一雙)	江戸時代初期	神戸市立美術館蔵
世界図(十二都市図とも三隻)	江戸時代初期	南蛮文化館蔵

8) 韓一瑾、「天草における言語接触とキリシタン関係訳語」(『天草諸島の歴史と現在』周縁の文化交渉学シリーズ8、148頁)

9) 土井忠生〔ほか〕編訳、『日葡辞書：邦訳』(岩波書店、1980)

10) 田村信義、『南蛮文化の受容』(関西図書出版、1982)、248頁

一九世紀に入り、訳語としての「世界」は受け継いでそのまま使われてきた。『和蘭字彙』(1855～58)はオランダ語の「wereld」を「世界」に訳した。その後の英和辞書、『英和对訳袖珍辞書』(1862)でも、『和英語林集成』(1867)でも、英語の「world」を「世界」に訳した。実は、「world」は700～1000年間から「mundus」の訳語として用いられ始めた¹¹⁾。そういう発展のルートにより、日本語で、「世界」という語は翻訳の場合において西洋世界概念に対訳することが確立してきたとは言える。

二 「世界」と「万国」——中国からの影響及び世界図式の再構築

1582年8月マテオ・リッチがマカオに到着し、中国での宣教生涯の幕を開けた。翌年、努力した結果、リッチが中国に入る許可をもらい、広東肇慶にきた。肇慶の知事王泮は地図の愛好者であり、リッチの部屋に掛けてある世界図に大変な興味を持っていた。そして、リッチに世界図を中国語に訳すことを頼んだ。宣教活動を展開するうちに、リッチは中国人の尊大な華夷観念が障害になることに気づいた。そういう原因で、リッチは世界地図を作ることが絶好のチャンスだと意識し、すぐに世界図の翻訳と作製に着手した。リッチは「このチャンスを借りにして、中国人がまだ知っていない教義を加える」というつもりで、「短い時間のうちにカトリック教をあまねく知られわたること」を望んでいた¹²⁾。1584年、マテオ・リッチが最初の世界地図を作った。『山海輿地図』という名で定めた。その後、マテオ・リッチはいくつかの世界図を作った。その中、1602年に作った『坤輿万国全図』が一番完全な版本である。惜しいことは、伝統的な天下観の影響で、マテオ・リッチの世界地図は激しい批判を浴びた後、数少なくて進歩的な知識人に受け入れられた以外、大きな影響は起こさなかった。しかも、リッチの逝去及び明の時代の終了に伴い、その影響も無くなっていった。一方、『坤輿万国全図』は日本に伝わられ、近代日本の世界観に対して大きな影響を与えた。鮎沢信太郎の研究結果によると、「わが国江戸時代前半期においてわが国人によって作られた世界図は概ね利瑪竇の世界図が直接間接の原典となっている。たまたま西洋から正確な世界図が転入してもこれを読解することの出来ない時代にあっては最も親しみ深い漢字漢文で記るされた利瑪竇世界図は最も大切な典拠となったものであろう¹³⁾。」リッチの世界地図は当時の日本知識人に重視されていた。洪川春海は1667年に『坤輿万国全図』によって地球儀を作った。稲垣光郎は1708年、『坤輿万国全図』の中の『南北両半球図』を単独に刊行し、『世界万国地球図』と呼ばれていた¹⁴⁾。その上、『采覧異言』において、リッチの世界地図を引用したのは32箇所¹⁵⁾。それ以外、江戸時代の著述で、其の地図に参照し作った世界図は25あり、引用したあるいはリッチの世界地図に言及したのは30種類以上だという。『坤輿万国全図』も多量に模写され、現存する模写本は21本もあり、東京・神

11) 寺澤芳雄、『英語語源辞典』(研究社、1997)、1577頁

12) (意) 利瑪竇、(比) 金尼閣『利瑪竇中国札記』(广西师范大学出版社、2001)、180頁。原文は「趁机加进有关中国人迄今尚不知道的基督教神迹的叙述。他希望在短时间内用这种方法把基督教的名声传遍整个中国」。日本語訳は筆者が訳した。

13) 鮎沢信太郎、『地理学史の研究』(原書房、1976)、114頁

14) 船越昭生、『「坤輿万国全図」と鎖国の日本——世界的視圏の成立』、『東方学報』、41号) 687-688頁

15) 鮎沢信太郎、『マテオ・リッチの世界図に関する史的研究』、『横浜市立大学紀要18』、1953)、88頁

戸・仙台・滋賀などの博物館に所蔵されている¹⁶⁾。そこからみれば、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』が日本に広範囲で大きな影響を与えたことが推測される。

『坤輿万国全図』の「万国」について、劉青峰、金観涛の研究結果によると、「万国」という語は昔から用いられていた。周代には「封建諸侯」を指していた。元の時代に至って、疆域の開拓に従い、政治視野も拡大された。「万国」は中国を越え、「外国」として使われて始まった。明の時代に入り、外国との交渉が増えてきて、特に宣教師の來華により、「万国」が「世界各国」として用いられるようになった。しかしながら、正式な文書の中にはあまり使われていなかった¹⁷⁾。例えば、マテオ・リッチが『坤輿万国全図』において「天下列国」「天下五大洲」など、伝統的な「天下」という語で「地球上の国々」を示していた。『明史』においても、「万历时、其国人利瑪竇至京师、为《万国全图》、言天下有五大洲¹⁸⁾。」と、依然として「天下」を使って、西洋の世界概念に対応している。中国における根強きの天下観のもとで、「万国」という語が使われていても、「天下」を動揺することはできないのであろう。「万国」が西洋世界概念の対応的な用語として、清末まで受け入れられていなかったのである。清末の長い間に、清政府は依然としてイギリスなどの西洋の国々を「夷」と称していた。それも天下観から近代世界観への転換がまだ成し遂げていない証拠の一つだと考えられる。

中国から宣教師の訳語の影響で、江戸時代の世界地図の名称も「万国」を使うのがよく見られる。一方、南蛮文化における「世界」という訳語の影響もあり、「世界」の用例も度々現れていた。J・ブラウの『世界図』、及びコヴァン、モルチェ共編の『世界図』はそのまま『世界図』と呼ばれている。世界地図に載っている説明文においても、「世界」で「地球上の諸国」を指す用例が見られる。例えば、三橋釣客の『地球一覽圖』には、「是圖分五大洲之目統轄一世界汪乎無涯且加以異國海上路程嗚呼天地之大理則或然乃始信騶子九州之說良不誣矣頃書買某梓以廣其傳世固當拭目而改觀也。」又、「世界周廻東西凡壹萬六千里南北同之時日本里程之計數也、天竺國之廣五天竺凡東西二千里南北一千餘也、唐土廣東西一千里南北凡八百餘之國也¹⁹⁾」と、世界の広さを感嘆していた。西川如見は『増補華夷通商考』において、オランダの土産を解説する時「世界圖*丸圖、平圖色々アリ、商売二無レ之」と書いてあり、又、『長崎話草』において、「世界万国金銀之沙汰付紅毛金島二到ル事」の條に「世界の圖に日本の東海に金島銀島あり²⁰⁾」と言った。それ以外、地理学の書について、大槻玄澤は『環海異聞』に「此天地世界は自ら四大洲に分ちたるもの也²¹⁾。」という文があり、齊藤正謙は『鐵研齋翰軒書目』に「當明氏之末。利瑪竇自意太里亞來。傳地毯圖說。於是東洋人始知有世界萬國²²⁾。」と書いてある。それに、司馬江漢の『西遊日記』にも「地球の圖を以て世界の事を話す²³⁾」という、「世界」の用例が見られる。そこから見れば、江戸時

16) 同上

17) 前掲と同じ、233～234頁

18) 劉青峰・金観涛『觀念史研究——中国現代重要政治術語的形成』(法律出版社、2009)からの引用、234頁

19) 鮎沢信太郎、『日本文化史上における利瑪竇の世界地図』(日本大學新聞社(発売)、1941)、41～43頁

20) 同上、63頁

21) 同上、72頁

22) 同上、75頁

23) 同上、107頁

代に、「世界」は中国からの「万国」と一緒に、「地球上の諸国」という意味として用いられていた。

その時期において、鎖国していたが、漢訳洋書は絶えずに日本に輸入されてきた。艾儒略 (Giulio Aleni, 1582~1649) の『職方外紀』やフェルピースト (Ferdinand Verbiest, 1623~1688) の『坤輿全図』は日本人の近代的な世界認識に大きな影響を与えた。特に1720年、徳川吉宗はキリスト教の流入を防ぐための洋書の輸入制限を緩和する処置を取っている。これをきっかけに學術書が大量に輸入され、西洋の知識や技術が急速に入るようになった。

前述したように、宗教文脈から発足し、地理知識の発展に伴い、「世界」という語は西洋の世界概念との対応関係が地理学上において確立されてきた。即ち、「世界」という概念は空間上の意味で定着したのである。世界地図のような西洋からの地理知識の広まりや発展に従い、日本最初の近代世界観を築きはじめた。今後の世界観構築のためにも土台を固めたのであろう。

三 「世界」と「天下」——訳語から概念へと

しかしながら、対訳関係の成立というのは、新旧概念の交換があらゆる方面で出来上がったとはいえない。普通の場合、概念の使用や普及は言語より時間がかかると言われている。概念は常に一つだけではなく、いくつかの内包が含まれている。「世界」が西洋世界概念に対訳され、空間上の意味は成立したが、政治や文化などの分野にはまだ及ばなかった。筆者の粗末な統計によると、明治初期一番影響力がある『明六雑誌』において、「世界」の用例は44箇所、「天下」は136箇所ある。「地球上の諸国」を言及する場合、用いられていたのは大体「世界」ではなく、「天下」である²⁴⁾。『明治のことは辞典』によれば、明治中期までの「世界」に関する解説は「世の中」という方が多く、中後期から「地球上の諸国」という意が多くなったのである²⁵⁾。そのような現象から考えると、伝統的な世界観は近代世界観へ転換する時、その余波が見られるのであろう。

伝統的な天下観や華夷秩序において、世界は中国を中心としているのである。梁啓超の論述によって、「盖中国即世界，世界即中国，一而二二而一者也²⁶⁾。」(筆者訳：中国は世界であり、世界は中国である。その一つだといっても二つであり、二つだといっても実は一つなのである。)中国伝統的な「天下」という概念は華夷秩序を基として存在しているものである。伝統的な華夷秩序の下で、天下は華と夷に分けている。そういう分け方は地域によるものであり、文化によって区別されているものとも言える。中華文明は夷狄より高い。中国の天下観や華夷秩序は中国だけではなく、周辺の国々にも深い影響を与えた。日本もそういう影響を受けられていた。長い歴史のうちに、華夷秩序は何度も挑まれたことがあるが、転覆はしなかった。それを背景として、「天下」という概念、実は複雑な内包が含まれている。中国の学者趙汀陽は「天下」概念を次のように総括した。

①地理学上の「天の下全部の土地」、中国式な三元的な構造の「天・地・人」の中の「地」。ある

24) 山室信一、中野目徹校注、『明六雑誌』、(東京：岩波書店、1999.5-2009.8)

25) 惣郷正明、飛田良文編、『明治のことは辞典』、(東京：東京堂出版、1986)、302~303頁

26) 梁啓超、「論今日所處之世界」、節録丁未七月初四日、『津報』【東方雑誌】、1907年、第4期

いは、人間が暮らせる全部の世界に相当する。②それに、その土地に暮らしているすべての人の思い、即ち「民心」ということ。例えば、「天下を得る」を云う時、その主な意味はすべての土地がもらえるということではなく（その点も実現したことはなかった）、大部分の人の民心をもらえるという意味である。それは非常に大切な天である。「天下」という概念は地理的な概念であり、心理的な概念でもあるということを表明しているのである。③一番重要なのはその倫理学・政治学の内包、それは「世界一家」あるいはユートピアのような存在である²⁷⁾。

「天下」の中に存在している空間・心理・政治三つの方面の内包は、伝統的な世界観の崩れに伴い、脱落されていった。それらは「世界」や「国家」や「社会」など、近代に発展されてきた新たな概念群に取って代わられた。

鎖国時代において、日本はただひとつの許可された窓口オランダから西洋の学術を輸入していた。それを蘭学と言う。蘭学は西洋の医学を初め、地理学・植物学など色な科学知識も含まれている。その後、ロシア語と英語の知識を加え、幕末に至って、洋学になった。洋学の発展に従い、日本人の知識や視野が大幅に拡大され、地理学上だけでなく、文化上から伝統的な世界観に対する批判も現れてきた。大槻玄沢は『蘭学階梯』において、地理学の角度から、伝統的な天下観の中華中心論に批判を出したことがある。「庸儒・庸医、天地世界ノ大ナル所以ヲ知ラズ。妄リニ支那ノ諸説ニ眩惑シ、彼ニ倣テ中国ト唱へ、或ハ中華ノ道ト称スルハ差ヘリ。輿地一大毯、万国配居、皆ナ其中ニシテ自ラ区域ヲ分チタルコトナレドモ」又「吾方ヨリ支那ノ倣称ヲ以テ中華ノ国ト唱へ、華人・華舶・華物ナド、称スルハ、何ノイワレナルゾヤ。惟慕効スルコト年久クシテ、何ニヨラズ彼ノ道ヲ喜ンデ他ヲ顧ミズ、剩ヘ地理ノ事ニ味キノ余リ、耳目聞見限リアリテ、唐・天竺トイヘル名ノミヲ知レル輩、甚キニ至リテハ和蘭モ支那ノ所屬トヲボヘ、或ハ支那ノ外ハ皆蛮夷トシテ論ジ及サズ。何ンゾ其学ノ粗ニシテ、且隘ナルヤ²⁸⁾。」同じ本の序言において、朽木昌綱も「夫天地人才、誰窮其至、誰定其地乎。支那僻在一边、独称中国。骄傲自限耳²⁹⁾」と中華中心論を激しく批判した。そういう批判からみれば、日本において、「天下」概念が含まれている心理的な部分が崩れ始まったということが考えられる。アヘン戦争で中国の敗戦、日本は危機意識が強くなる上に、世界文明中心の移転も気づいた。中国人が編纂した『海国図志』や『瀛環志略』は日本に輸入され、知識人の世界認識が一段高められ、世界秩序に対する現実的な理解や認識も一層深めるようになった。

ペリー来航に従い、日本も西洋に閉鎖している国門を開かれた。危機意識の下で、日本の国家意識が目覚めてきた。竹越与三郎が黒船来航によって、日本人に対して心理上に与えた衝撃を言及した時、「挙

27) 趙汀陽、『天下体系：世界制度哲学導論』（江蘇教育出版社、2005）、41～42頁。原文は「（1）地理学意义上的‘天底下所有土地’，相当于中国式的三元结构‘天，地，人’中的‘地’，或者相当于人类可以居住的整个世界。（2）进而它还指所有土地上生活的所有人的心思，即‘民心’，比如当说到‘得天下’，主要意思并不是获得了所有的土地（从这一点从来也没有实现过），而是说获得大多数人的民心。这一点很重要，它表明‘天下’概念既是地理性的又是心理性的。（3）最重要的是它的伦理学/政治学意义，它指向一种世界一家的理想或乌托邦（所谓四海一家）。」日本語訳は筆者が訳した。

28) 『蘭学階梯』『洋学 上』（日本思想大系64）（岩波書店、1976）、339頁

29) 同上、318頁

国震驚、人心擾々の中より、先ず霞のごとく、雲のごとく、幻然として現出せるものは「日本国家」なる理想なりき³⁰⁾。」と言った。その後、使節団の派遣、日本人は自分自身で西洋国の発達を体験した。福沢諭吉はその人達の中の一員である。アメリカに訪問した時、「日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖いものなしと威張っていた磊落書生も、初めてアメリカに来て花嫁のように小さくなってしまった³¹⁾。」福沢が日本に帰った後、世界事情を社会全体に伝えるように努力していた。彼は啓蒙活動を義務として強烈に自覚していた。『西洋事情』『西洋旅案内』『掌中万国一覽』など、世界地理や事情を紹介する啓蒙書を出版した。明治維新初期、福沢諭吉を初め、啓蒙家たちが一所懸命西洋文化を日本国民に伝えていた。実は、そういうような広い分野で、大規模な西洋文化輸入活動は心理的な方面から、日本人の「世界」への認識を変わってきた。

おわりに

日清戦争で中国の敗戦は華夷秩序が徹底的に崩れたということを宣告した。アヘン戦争から華夷秩序根本的な根拠といえる朝貢制度が崩壊し始まった。日本に敗戦した後、その制度が滅ぼされたということが明らかにした。伝統的な天下観も存在する根拠を失った。

元は仏教用語であった「世界」が、近代に入り、宗教原因で初めて西洋の世界概念に対訳された。それを經由して、近代地理学の発展とともに、特に世界地図の広まりにより、空間的な内包が築かれてきた。それから、日本対外意識の向上、世界認識の拡大に従い、益々心理的や政治的な内包も充実されつつある。

近代に入り、日本は中国伝統的な天下観と仏教の世界観から切離れ、地理学から発足、文明中心移転への認識を背景として心理上から世界観を再構築した。その後、日本が「世界」における位置づけを確定する上に、「世界」又は「世界秩序」に対しても再認識した。

概念は往々にして単一な内包を含んでいるわけではない。そういう原因で、伝統概念から新たな概念への転換も幾方面から一層一層脱落して、取って代わるのが多い。「世界」という概念は世界観のキーワードとして、定着するうちにその世界観の転換も映している。訳語は新たな概念を輸入する時最初の手順で、概念への理解や形成に対して知らず知らずのうちに影響していると言えよう。

30) 竹越与三郎、『新日本史(上)』、(岩波文庫、2005)、31～32頁

31) 福沢諭吉、『新訂福翁自伝』(岩波文庫、1978)、117頁